

作品梗概集 5

1. ここに掲載した各梗概は、十七世紀フランス演劇研究会における発表をまとめたものである。
2. 各々の梗概の執筆は、研究会での発表者が担当した。
3. 掲載の順序は、原則として、担当者の意図を尊重し、担当者別にまとめ、その中では初演年代順とした。
4. 初演年代は、原則としてダイエルコウフ = オルスポエルに拠ったが、他の研究者の推定に基づく場合はその研究者の名前を年代の後に付した。
5. 読者の便宜を考慮して、作品梗概集の後に索引を付した。

Rotrou: *Don Bernard de Cabrère*

ジャンル 五幕韻文悲喜劇

初演 1642年-47年 オテル・ド・ブルゴーニュ座

出版 1647年、48年

主な出典 Lope, *La Adversa Fortuna de Don Bernardo de Cabrera*.

スペインのコメディアに取材した作品の一つで、1642年から47年までの復活祭の演目として、悲劇『聖ジュネ正伝』、喜劇『妹』とともに書かれたと推定される。ロトルーは主要登場人物や状況設定のすべてをローベに借りた。タイトルになっている人名、ベルナルは主人公の名前ではない。実際の主人公はその友人のローブ・ド・リュヌヌである。何事にも如才なく立ち回り、たいした功績もなく宮廷人として成功していくベルナルとその陰でひたすら国家に尽くしながら、功績に釣り合った地位を与えられないローブの対照が描かれる。ローブの勝利の報告はみなベルナルのものに取り違えられ、ベルナルは劇中で提督に任命されるが、ローブはその勝利も勝利の代償も自分のものだと主張して、狂人扱いされる。運命の仕組んだ巧妙な罫のなかでもがくローブに対して、親友を自認するベルナルは手助けを約束する。その約束は恋に浮かれる愚かな王と王の好意を受けて得意絶頂のベルナル本人のおざなりな対応で決して果されない。「不運」の連続でローブがついに宮廷を去るまでがこの劇の主要な筋であるが、その都度深まっていく主人公の運命に対するルサンチマンは相当のもので、彼の最後のせりふは宮廷社会批判となって鋭い。ベルナル側から言えば、宮廷でいかに出世するかという宮廷人心得という見方もできる。しかし、地上的権威への警告という意味では『聖ジュネ』、『妹』ともども教訓を含んだ展開である。場所はサラゴサの王の宮殿で、時間は24時間前後。偽手紙、手紙の取り違い、誤解、誤認が巧みに配されている。最初の場面から手紙の紛失が問題となり、重要なポイントで手紙が絡んで来る、「手紙の劇」とも言える。

〔第一幕〕

ドン・ロープ・ド・リュンヌ Don Lope de Lune は従者のラザリーユ Lazarille とともにアラゴン王ドン・ペドル Don Pèdre の宮廷に赴いた。それまでも功績の割りには出世に恵まれなかったロープのために、親友のベルナル・ド・カブレール Bernard de Cabrère が特別にはからって、彼を報告役に任じたのだ。これでようやく王との謁見がかなうと思ったのも束の間、懐に入れたはずのベルナルから王にあてたロープの活躍を証言した手紙がなくなっていた。ベルナルはすぐにも宮廷に到着するであろうから、手紙を探して今朝来た道に戻る時間はない。運を天に任せて、手紙なしに王に報告をしようと決意する。一方、王はサラゴサに敵軍が迫っているとの報告を受け、恋するレオノール Léonor からのつれない返事の手紙にも気を取られている。ロープは王の側近の伯爵に促されて進み出るが、王は全く上の空で、聞いていない様子がありありとわかる。ロープが寵臣ベルナルのサルディニヤでの活躍を語っても、殆ど反応がない。それどころか書類を作って報告しろと命じられる。ロープは自分の功績を報告することを諦め、不運を嘆きながら退場し、王が伯爵とのんきな恋愛問答をする間に急いで文書を整える。王は書類を受け取るが、レオノールがやって来るとそれを床に落とし、踏み付けて忘れる。ロープとラザリーユは絶望し、ベルナルの負担を軽くするよう、宮廷を去ろうと言う。

〔第二幕〕

ベルナルが到着し、ロープの諦めの早さを責め、自ら王に報告を行う。王は一言聞いて彼を提督に任じ、オッソヌ公とする。そしてサルディニヤでの戦いを語るように乞うと、椅子を持って来させて、腰を据える。ベルナルは語り始め、王は彼の長口舌にうつらうつらし、ちょうどベルナルがロープの行動を称えるところで眠ってしまう。我に帰った王が聞くのは、ロープ以外の、比較的小さい仕事をした人々の名前であった。王は彼らに惜し気なく褒美を約束し、ロープには何も与えない。ベルナルはこのような不運はその後の大きな幸運を期待させるものだとロープを慰める。そしてロープはヴィオラント王女 Violante の侍女から手紙を投げ与えられ、ベルナルの励ましの言葉を聞いたばかりなので、この手紙が王女自身からのものと誤解し、運が開けてきたと喜ぶ。

〔第三幕〕

王女とレオノールはベルナルを巡って恋のさや当てに熱中している。王女はレオノールが兄王と結ばれればベルナルは自分のものと思っているので、兄にもベルナルにもはっきりと感情を明かさないう彼女にいらだっているのだ。一方のレオノールは王の秘書のペレス Pérès にベルナルへの恋心を打ち明け、王の興味を自分からそらすため、ベルナルの筆跡をまねてレオノール宛の偽手紙を書くように頼む。秘書は快諾し、執務室に忍び込んで偽手紙を書き始める。その背後に夢うつ状態の王がやって来る。王は「秘書からレオノールへの恋文」を現行犯で差し押さえ、彼を捕えさせる。激怒している王の様子を見てベルナルは王を怒らせたのはロープだと思い込む。ベルナルは再びロープに名誉挽回の機会を与えるつもりで戦場に追い立てる。ロープは受け取った「王女の手紙」に勇気を得て、出発する。手紙にあった今夜会うという約束はその犠牲になって果されない。

〔第四幕〕

レオノールが王に気持ちを受け入れない言い訳を直接行っているところへ、ベルナールが戻って来る。勿論ロープも一緒であり、今回もロープの活躍で勝利をおさめていた。話を聞く前に王は彼を新しい領地の名前で呼んで、また三つの土地を追加して与える。ある兵士の功績、という形でベルナールがロープの名前を隠して報告をすると、王はベルナールが謙遜して自分のことを語っているのだと思い込む。王女もレオノールも共に同じように「ベルナールの功績」に感心し、いよいよ恋心を募らせる。ロープとラザリーユは取り残され、王にはついに名前を呼ばれることなく、また王女には冷たくあしらわれて、途方に暮れる。そこへ手紙をくれた侍女が現れ、また彼を励ます。度重なる不運を嘆きつつも、ロープは愛されている嬉しさをベルナールに打ち明けるが、その相手の名前は言わない。

〔第五幕〕

王女はベルナールに打ち明けるが、ベルナールは相手がロープだと勘違いして出て行く。ちょうどロープが気持ちを確かめようとして王女のもとへ来た。手紙にもロープにも覚えのない王女は唐突なロープの告白に仰天する。「彼は狂っている！」王女が王に助けを求めると、ロープは積年の恨みを一気に爆発させる。そして結局狂人として衛兵に捕えられ、連行される。王はその恨みごとを自分の恋に対する警告だなどと勝手に納得する。ロープが王と王女への怒りをベルナールに訴えていると、ラザリーユが王女のスカーフと新たな手紙を持って帰って来るのだが、ベルナールはそれが王女の年老いた侍女の持物と証言する。すべてはロープの誤解であった。ベルナールはロープに対する運命の憎悪には勝てないと言い、ロープも宮廷社会の不当さに憤慨し、それを見捨てる。王は妹をベルナールに嫁がせることで、レオノールを自分に引き寄せる。ベルナールと王女が相愛なのを見て、レオノールは諦め、王と婚約する。王は足元に踏み付けた老いた侍女からの手紙を認め、ベルナールにロープの名前と功績を聞く。だが何もかも遅すぎた。既にロープは宮廷を去っていた。

(浅谷)

Rotrou : *Diane*

ジャンル 五幕韻文喜劇

初演 1632-33年(推定), オテル・ド・ブルゴーニュ座

出版 1635年

出典 Lope de Vega "Villana de Xetafe" (1620年出版)

ローペの劇作品を基にしつつ、三単一の法則を遵守しようとしたロトルーの努力がうかがえる作品。しかし、必ずしも成功しているとはいえない。時は朝から夜、場所はパリの街路で、街路にそってフィレモン、オリマン、リジマンらの家が並んでいる。屋内の場面はなく、それゆえに場所の一致が守られているというものの、全てのアクションが路上で行われることになり、展開に無理がでて

くる。実際、場面間の断絶が多く、したがって、つなぎのために筋の根幹からはずれた短い場面を挿入せざるをえない。さらに、ロザンドを始め言及されるだけで登場しない人物(煩雑さを避けるため、要約では抹消)が多すぎる。またリザンドルの必然性のない帰還、ディアヌの胸の開陳など、古典主義的劇作法から見れば欠陥が多い。登場人物は個性がなく、全体の印象は希薄である。フィレモン、オリマン、ダモンら、父親役の登場場面が多いのが特徴。

〔第一幕〕数軒の家が立ち並ぶ、パリのとある街路。恋人リジマン Lysimant を追って村を出奔した羊飼娘ディアヌ Diane は、金のために自分を捨てたリジマンを取り戻すため、セリレ Célirée と名のって、彼と婚約した金持ち娘オラント Orante の侍女になりすましている。彼女は同じ村出身の娘ドロテ Dorothée を腹心にしており、ドロテから、父親が娘ディアヌをを探しに来ていることと、以前からディアヌに夢中の羊飼シルヴィアン Sylvian が、リジマンから情報を得ようと彼の御者になっていることを知る。慌てたディアヌはかねての計画を実行に移す。婚約者へのオラントの不信感を煽るため、未知の人物から依頼されたと以前もらったリジマンからの恋文をオラントへ渡したのだ。だがオラントは実はアリスト Ariste と恋仲で、この「不実」はもっけの幸い、父親のフィレモン Filémon に話して婚約を解消してもらおうとするのだった。

〔第二幕〕ディアヌの父親ダモン Damon、失踪した愛娘を探しあぐねて、娘の恋人だと噂されていたリジマンの家を訪ねるが、シルヴィアンにすげなく追い返されてしまう。さてリジマンは、まだディアヌを愛しているのだが、父の厳命もあり、財産のない身分違いの娘との結婚は諦めねばならない。せいぜいオラントを好意的に見る努力をしようと御機嫌伺いに出かけるが、戸口でフィレモン、オラント父娘にディアヌ宛の恋文をつきつけられ、婚約を破棄されてしまった。プライドを傷つけられたリジマンは、そこに現れたセリレ(ディアヌ)に、実は本命はロザンド Rosinde で、今日にも彼女と結婚することを女主人に告げてくれ、と言って去る。ディアヌに新たな試練。

〔第三幕〕アリストはオラントの裏切りを激しく非難、彼女の言い分を聞かずに去ってしまう。リジマンとロザンドの結婚話も聞かされて消沈する女主人に、セリレ(ディアヌ)はリジマンの新たな婚約を座礁させる計略を語る。ロザンドにはリザンドル Lysandre という幼い頃からの許婚者がいたが、両親亡き後、運試しに東洋に船出したまま長いこと帰ってこない。だからセリレがその男に変装し、ロザンドの前に現れたならば、当然リジマンは袖にされるだろう、と。さて結婚を申し込みに行ったりリジマンは、ロザンドの父親オリマン Orimand から好意的に迎えられる。ところがリザンドルに扮したディアヌがその後現れ、たやすくオリマンに娘の婚約者として受け入れられる。

〔第四幕〕オラントがアリストに見限られたことを知らないフィレモンは、彼らの仲をうすうす気づいていたので、娘によかれと思ひ、当事者抜きでふたりの婚約を決めてしまった。それを知ったオラントは抗議し、彼との関係が破綻したことを告げるが、アリストの怒りは彼女を愛すればこそだ、と父親は取り合わない。一方、リザンドルの帰還により、ロザンドとの結婚の目論見も破れてしまったリジマンは、深く落胆する。策略の成功に酔うディアヌ。しかし、アリストとの結婚に自信がもてないオラントは、リジマンとの結婚を望み、それをセリレ(ディアヌ)に打ち明ける。窮地に立ったセリレはリジマンと会い、ディアヌが親戚の遺産を相続して大金持ちになったこと、その

報せをもたらしたのがリザンドルであることを告げる。ではディアーナと結婚しよう、と喜ぶリジマンに、彼女は正体を明かし、いつまでも恋と損得を秤にかけける男を罵倒する。彼は反省し、謝罪。ふたりはよりを戻す。

〔第五幕〕アリストは暴言を後悔し、オラントと婚約。リジマンはオリマン家に出かけてリザンドル(ディアーナ)と会い、ディアーナの話の真偽を確かめる。ところがそこに本物のリザンドルが帰還した。ふたりのリザンドルを前にして皆は当惑。真のリザンドルの方がオリマンに証拠の手紙を見せ、ディアーナの策略は水泡に帰した。彼女は皆に全てを告白し、死のうとする。だがダモンが現れ彼女の真の素性を明かす。リザンドルとディアーナはある貴婦人が産んだ男女のふたごで、息子だけを相続人にするため、娘ディアーナは死んだと偽ってダモンの養女にしたのだ、と。リザンドルの裏付けと、胸と右腕のほくろからディアーナが本人であることが証明され、リジマンは彼女との結婚を快諾した。一同は満足。ただしシルヴィアンは失恋。彼を慕うドロテとの結婚に同意はしたが、この苦しみは暴飲暴食でしか癒せないだろう。(鈴木)

Rotrou : *Célimène*

ジャンル 五幕韻文喜劇

初演 1633年(推定)、オテル・ド・ブルゴーニュ座

出版 1636年

出典 イタリア喜劇“Ingannati”(作者不明、1531年出版)、d’Urfé“Astrée”、および先行の田園劇

恋する男に捨てられ、男の心を取り戻すために男装して男の新しい恋人を誘惑するというテーマは、出典に掲げた『アストレ』を始めとして、Montemayorの“Diana”、Du Verdierの“Diane française”などの田園劇に頻繁に見られる。この作品よりもやや早く上演されたと思われるロトルー自身の『ディアーナ』もそのひとつだが、『セリメーヌ』の方が構成は緊密で無駄な場面が少なく(場面のより自然な連続性を保つため、木陰での立ち聞きという手段で乗り切っている)、登場人物の造形も比較的明確である。場所は統一されているが、時間は24時間を超える。盗賊による女主人公の強姦未遂、フロラントが二度にわたって胸を見せること、エロティックな冗談、女同士の同性愛の暗示など、bienséanceにおそろしく反しているが、総じて落ち着いて明朗な気分彩られた作品である。

〔第一幕〕パリから叔母オラント Orante の住む田舎を訪れたフロラント Florante は、森を散歩しながら、フィランドル Filandre との恋を叔母に打ち明ける。彼もこの地に来ているが、心は既に当地のセリメーヌ Célimène に移っていた。フロラントとオラントが立ち聞きしているのを知らず、彼はセリメーヌに愛を告白する。しかし手ひどくふられてしまい、フロラントからは非難と嘲笑を浴びる。セリメーヌはどんな男にも難攻不落だ、と負けおしみを言う彼に、フロラントは、男装して彼女の心を射止めてみせる、と。もしそれが成功したらフロラントの元に戻ると彼は誓う。

〔第二幕〕多くの男から求愛を受けているセリメーヌが、姉のフェリシー Félicie に明かした「マシ

だと思ふ男」はアリドール Alidor。彼は彼女に夢中だが、気位が高く恋に臆病なセリメーヌがことごとく冷たい態度を示すので絶望している。フェリシーと恋仲の友人リジス Lysis の勧めで、恋文を書き始めたアリドールだったが、苦悩の果て、森の中で眠り込んでしまった。彼を見つけた姉妹は手紙を読み、セリメーヌは残酷な一節をつけ加えようとして姉に止められる。そこに現れたのはフロリダン Floridan、つまり男装したフロラント。姉は彼(女)の美貌に驚嘆するが、妹は憎まれ口をたたく。

〔第三幕〕セリメーヌはフロリダンに実は一目惚れしたのだった。彼(女)は甘言を弄してすっかり彼女の心を征服してしまう。フェリシーは妹と彼(女)の恋を知って、深く苦悩する。彼女も彼(女)を恋してしまったのだ。妹がライヴァルとは!しかも妹の方がずっと美しい……。うるさく付きまとうリジスが今は煩わしくて仕方がない。

〔第四幕〕フロリダンがフェリシーをも口説く現場を盗み見したアリドールとリジスは、剣を抜いて彼(女)に詰め寄る。フロリダンは、姉妹を同時に口説いているのは策略あつてのこと、うまくいけば皆幸せになれる、とふたりを説得。さて、フロリダンの愛情に確信がもてない姉妹は、それぞれ夜の逢引を彼(女)に約束させる。セリメーヌはここ森の中で。フェリシーは自室で。

〔第五幕〕だがフロリダンは、自分の代わりにアリドールとリジスを逢引の場所に赴かせる。胸をときめかせて森にやって来たセリメーヌだったが、盗賊たちに襲われ、今にも暴行されようとした時、駆けつけたアリドールに救われる。フロリダンの背信を知ったセリメーヌは激怒。だがそこに当の彼(女)とフィランドルが現れ、事の経緯を語り、フロリダンは女であることの証明に胸を見せる。一方、フェリシーはフロリダンを迎えに出て、リジスに出くわす。彼からフロリダンの裏切りを知らされて失神。一同が現れて、我に帰った彼女はフロリダンを糾弾する。彼(女)はセリメーヌと共にさんざん彼女をからかった末、胸を披露する。全てが明らかになった。姉はリジスの元に戻り、妹はアリドールを受入れ、フィランドルは才知ある勇敢なフロラントをこの上なくいとしく思い、みな幸福に家路につく。(鈴木)

Rotrou : *Filandre*

ジャンル 五幕韻文喜劇

初演 1633年(推定). オテル・ド・ブルゴーニュ座

出版 1637年

出典 Chiabrera “Galopea”(Stiefel の見解)、Groto “Pentimento amoroso” および先行の田園劇 (Lancaster の見解)

初演は『セリメーヌ』よりやや遅いとされている。主要登場人物は6人で、姉妹、兄弟、兄妹の3組。恋人としては2カップルが形成されており、はみ出した愛されない男女ひと組が、恋人たちの仲を裂こうと策略を弄し、失敗する話である。こうしたシンメトリックな人物構成や、人物の個性が

一様で判別が困難なこと、そして舞台の設定状況(森の一隅、河)などは明らかに田園劇の作法をそのまま踏襲している。女性が胸を見せて刺すかキスをするか、と男性に迫る場面なども同様だ。ただ、人物全員が全て類似しているわけではなく、愛されない女であるセフィーズは、当時の女性としては型破りの物の考え方をしている(これも“型破りの型”とは言えるが)。たとえば、毛髪は女から男へ与える愛の服従と束縛のしるしであったが、彼女はあえて男から毛髪を奪う。また、策略が水泡に帰した後、共犯の男へ“理性的な愛”を提案するのも彼女である。“恋愛のディスクール”への不信が、折にふれ彼女によって語られるのも興味深い。時は24時間(ただし四幕6場で二日に渡っていることが暗示されている)、場所は二箇所である。

【第一幕】パリ近郊の森の一隅。テアーヌ Théane とセフィーズ Céphise の姉妹が、それぞれの恋を打ち明ける。姉はティマント Thimante と相愛の仲だが、妹はセリドール Célidor に恋してふられてしまった。セリドールはティマントの妹のネレ Nérée と恋仲だったからである。さて、セリドールの弟のフィランドル Filandre はテアーヌにぞっこんである。またセフィーズは、姉に見せた態度とは裏腹に、セリドールを諦めてはいない。フィランドルとセフィーズ、この愛されないふたりは結託し、策略を用いて、テアーヌとティマント、ネレとセリドールそれぞれのカップルの仲を断ち切ることにする。まずセフィーズがティマントから恋文をもらったことにして姉の心を傷つけ、ティマントには姉が心変わりしたと偽りの報告をする。

【第二幕】一方フィランドルは、兄がセフィーズに心移したとネレに告げる。わけもわからずネレに邪険にされたセリドールは、絶望のあまり眠り込んでしまう。そこにやって来たセフィーズはこの機会を逃がさず、彼の美しい金髪を切り取って自分の「宝物」にするのだった。彼女とフィランドルは、セリドールが目覚めて立ち聞きしているのを知って、ネレがフィランドルを口説いた事件を話題にする。打ちのめされたセリドールに、セフィーズはあらためて言い寄るが、彼は相手にしない。

【第三幕】テアーヌとティマントの仲は互いの信頼が失せて険悪になった。フィランドルは喜んでテアーヌに接近するが、手ひどく退けられてしまう。悩むテアーヌは同じ悩みをもつネレに相談するうち、セフィーズが共通のライヴァルだとわかる。そこにセフィーズが現れ、セリドールの髪を見せびらかしたので、ふたりはティマントとセリドールのうちどちらを彼女は愛しているのか、と詰め寄る。セフィーズは、決定的な嘘は言わないがさりとして真実も言わず、曖昧な話し方でその場を切り抜けようとする。不信を抱いたふたりは、ティマントを連れて来てセフィーズと対面させることにする。

【第四幕】だがティマントは苦悩のあまり入水自殺を決意し、妹を振り切って遁走してしまった。事態は深刻化した。兄の身を案じるネレと、彼はセフィーズと一緒だから心配ないと言い張るフィランドルの間でいさかいが起き、そこにセリドールが来あわせて、ネレの変心はフィランドルのでっちあげだとばれてしまった。セリドールとフィランドルは兄弟喧嘩を始め、両者とも剣を抜いてあわや血の雨が降るかと思えたが、ネレとテアーヌに阻止される。フィランドルはふてくされて去るが、結局彼の策略は皆の知るところとなってしまった。セリドールとネレの仲は回復した。

〔第五幕〕フィランドルとセフィーズは策略の失敗を認める。と同時に、この確認の作業の過程で、互いに対する愛情をも確認することになった！ただそれは二番目の愛であり、ふたりはそれを率直に認め合いつつ、ふたりの愛を未来に向けて徐々に成熟させていく決意をする。そこに取り乱した羊飼いが現れ、ティマントと名乗る男がセーヌ河に身を投げた、と報告。ふたりは自分たちが犯した罪に愕然とし、皆に知らせて全てを告白し、最終的には死をもって罪を購う覚悟で彼の捜索に出かける。場面変わってセーヌ河の小島(ランカスターの推測ではサン・ルイ島)。ティマントは生きていた。船頭に河から引き上げられ、手近なこの島に連れて来られたのだった。皆が駆けつけ、フィランドルとセフィーズの罪は、「恋の罪」ということで許される。(鈴木)

作品梗概集索引

Bidar	: <i>Hippolyte</i>	III	79
Boyer	: <i>Ulysse dans l'île de Circe</i>	III	95
Corneille, Thomas			
	: <i>Ariane</i>	III	89
	: <i>Bérénice</i>	IV	83
	: <i>Camma</i>	III	88
	: <i>Circé</i>	III	98
	: <i>Darius</i>	IV	85
	: <i>La Mort d'Achille</i>	III	91
	: <i>La Mort de l'empereur Commode</i>	VI	83
	: <i>Le Comte d'Essex</i>	VI	92
	: <i>Persée et Démétrius</i>	VI	85
	: <i>Timocrate</i>	IV	81
Corneille, Pierre	: <i>Andromède</i>	III	96
Desfontaines	: <i>Belisaire</i>	VII	100
Desmaretz de Saint-Sorlin	: <i>Mirame</i>	VII	103
de Visé, Donneau			
	: <i>Les Amours de Bachus et d'Ariane</i>	VII	107
	: <i>Les Amours de Venus et d'Adonis</i>	VII	106
Garnier	: <i>Hippolyte</i>	III	74
Gilbert			
	: <i>Hypolite</i>	III	78
	: <i>Les Amours de Diane et d'Endimion</i>	VII	105
Gougenot	: <i>La Fidelle Tromperie</i>	VII	96
La Pineliere	: <i>Hippolyte</i>	III	76
L'Hermite de Vauzelle	: <i>La chute de Phaéton</i>	III	94
Lully et Quinault			
	: <i>Alceste</i>	VI	88
	: <i>Atys</i>	VI	91
	: <i>Cadmus et Hermione</i>	VI	86
	: <i>Thésée</i>	VI	89
Mairet			
	: <i>Chryséide et Arimand</i>	IV	63

	: <i>La Silvanire</i>	IV	66
	: <i>La Sylvie</i>	IV	65
	: <i>Les Galanterie du duc d'Ossonne</i>	IV	68
Pradon	: <i>Phèdre et Hippolyte</i>	III	81
Rotrou			
	: <i>Agésilan de Colchos</i>	VII	94
	: <i>Antigone</i>	VI	80
	: <i>Belisaire</i>	VII	98
	: <i>Célimène</i>	VIII	84
	: <i>Cleagénor et Doristée</i>	IV	72
	: <i>Crisante</i>	VI	78
	: <i>Diane</i>	VIII	82
	: <i>Don Bernard de Cabrère</i>	VIII	80
	: <i>Filandre</i>	VIII	85
	: <i>Iphigénie</i>	VI	81
	: <i>La Bague de l'Ou'bli</i>	III	83
	: <i>La Belle Allphrède</i>	III	85
	: <i>La Sœur</i>	VII	102
	: <i>Laure Persecutée</i>	III	86
	: <i>Les Occasions perdues</i>	IV	70
	: <i>L'Heureux Naufrage</i>	VII	93
Tristan l'Hermite			
	: <i>La Marianne</i>	III	74
	: <i>La Mort de Chrispe</i>	IV	78
	: <i>La Mort de Sénèque</i>	IV	77
	: <i>Osman</i>	IV	80
	: <i>Panthée</i>	IV	75

* ローマ数字Ⅲ、Ⅳ、Ⅵ、Ⅶは掲載した既刊号数を示す。